

持続的な社会を作る

「論語と算盤の一致」

寄稿 渋沢健



丁髷で羽織袴を着た栄一

明治から大正にかけて日本に近代経済社会の基礎を作った実業家、渋沢栄一。日本で初めて銀行を設立し、日本初の株式会社制度を導入した「日本資本主義の父」と呼ばれた人物です。彼が主張したのは「論語と算盤の一致」。すなわち、中国の古典「論語」にある道徳と、金儲けである経済という、相容れない2つを融合させることこそ、日本の発展には不可欠という考え方です。新たな経済の秩序を模索せざるを得ない今、栄一の言葉は多くの示唆を与えます。

真正の利殖は仁義道徳に基づかなければ、決して永続するものではない

〔「論語と算盤」仁義と富貴〕

およそ270年間におよぶ江戸時代(徳川時代、1603〜1868年)の政治的安定期は、外国勢力から隔離された日本は、文化的、社会的、経済的に独自に発展した時代でもありました。孔子の教え、つまり、仁義を通じて社会的秩序を築く道徳は、この時代に武士階級に開花し、社会の知性的基盤となります。

儒家の祖である孔子は、紀元前500年ぐらいに活動した中国の思想家であり、儒教は紀元300年ぐらいに朝鮮半島から日本に到来したと言われています。「論語」とは、

論語と算盤という懸け離れたものを致せしめる事が今日の緊要の務めである

〔「論語と算盤」処世と信実〕

として名声を築くことになりました。また、株式(合本)制度の先導者であるため、渋沢栄一を「日本近代的資本主義の父」と評価する向きもあります。栄一が設立に関与した会社はおおよそ500社と言われ、「日本初の近代的ベンチャー・キャピタリスト」と称しても間違いはないでしょう。

従って渋沢栄一は、自分自身のため、そして社会のために豊かさを持続させるためには、「論語と算盤が一致すべき」と考えたのです。渋沢栄一の「訓言」に現代の光を当て、過去の功績をただ尊ぶだけではなく、次世代の繁栄を実現するために、彼の思想を今の時代に応用したい――。これが私の伝えたいことです。



新製し洋服を着た栄一

算盤づくで考えるだけでは豊かさは持続しない

栄一の活動の「広さ」と「深さ」の秘訣は何でしょうか。「論語」が表す道徳と「算盤」が表す経済という一見かけ離れている両者は、実は一致しているのだという栄一の信条にそのヒントがあります。

ただ善いことをするだけでもだめで、ただ金儲けをするだけでもだめで、ただ豊かさを持続させるためには、「論語」と「算盤」、この両方が必要なのです。

1868年の江戸期の終末から20世紀初期は、封建時代の社会秩序を解かれた日本が驚くべき経済的發展による世界的近代国家として身を起こした時期です。また、日露戦争(1904〜05年)の勝利によって、それまで西欧諸国の特権であった軍事国家ともなりました。明治維新と呼ばれるこの時代は、活気に満ちた多くのイノベーターによる素晴らしい功績に恵まれた、日本史の大きな転換期です。そのイノベーターのひとりが渋沢栄一です。1840年、現在の埼玉県深谷市にあった豪農商家に生を受け、日本初の銀行設立などの実績により、明治時代を代表する実業家と

算盤に長けていれば、自分の懐は温まるかもしれません。しかし、仁徳が欠けていては、せっかく築いた富に持続性がないかもしれません。また、「論語」を読むことで自分の修養を積むことができたとしても、その人に経済的な概念が欠けているようであれば、そもそも持続させるべき富というものを持ち得ません。

我国の有様は、是迄やり来た仕事を大切に守って、間違いなくやっつて出るといふよりも、更に大に計画もし、発展もして、盛んに世界列強と競争しなければならぬのである

〔「百箇目話」元氣振興の急務〕

これは、渋沢栄一が大正時代に話したと思われる講演録からの一節です。当時は歴史上でも、日本がもつとも豊かさに恵まれていた時代でした。そのような「黄金時代」において栄一が鳴らした警鐘とは、「もって、元氣を出せ!」でした。

渋沢 健 しぶさわ けん

1961年、神奈川県生まれ。渋沢栄一の5代目の子孫。83年米テキサス大学卒業。87年UCLA経営大学院修了、MBAを取得。JPモルガン証券、ゴールドマン・サックス証券、大手ヘッジファンドのムーア・キャピタル・マネジメントなどの外資系金融機関を経て、2001年投資コンサルティング会社のシブサワ・アンド・カンパニーを設立、代表取締役就任。2008年コモンズ投信設立。渋沢栄一記念財団理事、経済同友会幹事。主な著書に「巨人・渋沢栄一の「富を築く100の教え」(講談社)、「渋沢栄一とヘッジファンドにリスクマネジメントを学ぶキーワードはオルタナティブ」(日経BP社)、「シブサワ・レター 日本再生への提言」(実業之日本社)、「渋沢流 30年長期投資のすすめ」(角川SSコミュニケーションズ)。



徳川昭武一行(マルセイユにて。後列一番左が栄一)



東京養育院板橋本校を訪れる栄一



第一国立銀行

およそ90年前、戦前の日本は現在から見れば、非常に活力に満ちた社会であったように見えます。ところが、明治維新の時代から日本の近代化に貢献してきた老人・渋沢栄一の目には全く違う社会風景として見えていたようです。

「頃日来社会の上下一般に元気が銷沈して、諸般の発達すべき事柄が著しく停滞し、来たやうである。」

栄一の言葉から推測すると、停滞の原因とは、それまでの成功だったようです。

「これは要するに社会が稍々秩序的になつた共に、人々が何事にも慎重の態度をとるやうになつて来たから、其の余弊として斯の如き現象を見るに至つたことであらう。」

明日が今日より良くなると信じるより、明日が今日と同じであればよしとし、社会が一般的に「ことなかれ主義」に陥っている……。まるで、現在の日本社会の現象に嘆いているようです。

「其の日其の日を無事に過されへすればそれでよいといふ順行のあるのは、国家社会にとつてもっとも痛

「嘆すべき現状ではあるまいか。現在我國の情態では未だ左迄沈着や慎重を尊ぶべき時代ではない。」

銀行という職業は、今までやってきたことを大切に、間違ひなくやるということだと思つていました。ただ、日本の銀行の創始の意志は違ひます。

「我國の有様は、是迄やり来た仕事を大切に守つて、間違ひなくやつて出るといふよりも、更に大に計画もし、発展もして、盛んに世界列強と競争しなければならぬのである。」

景気が低調になると、金融政策や財政政策という国からの「てこ入れ」への要請がすぐさま聞こえてくるのが現代です。また、企業において不正事件などが発覚すると、国の監視の不備のせいだという批判が高まります。

結果として、規制強化だけが独り歩きしてしまうのは、昔も同じだったようです。

「実業家は勿論、其の他一般国民は大きに元氣振興に力を用ひ、似て國運の発展に資せなければならぬのであるが、近來の傾向は、却てこれに反し、動もすれば政府万能主義を

叫び、何事も政府に依頼せんとするの風がある。」

このように、栄一の当時の講演録で「維新前後」という言葉を「戦後」と置き換えただけで、ほとんど当時の言葉が現在でも通用してしまうというのは、驚くべき事実です。

「今より四五十年前、即ち維新前後に於ける人々の活動に比するに、その元氣に於けて実に天地の差がある。」

どの時代でも、旧世代は次世代が「なつとらん」と嘆きます。

「老人が懸念する程に元氣を持つて居らねばならぬ筈であるのに、今の青年は却て余等老人から「もつと元氣を持って」と反対な警告を与へねばならぬ様になつて居る。」

ただ、大正時代と平成時代がこのように共通することがたくさんあることには、やや危機感を抱きます。日本人が無氣力に当時の社会風潮に流れた後、やってきた時代とは昭和初期です。この時代は日本の暗黒時代と言つていいでしょう。栄一の言う「リスク」とは、持続性というリターンを得るためでした。

「危険と思はれる位と謂うても、余は敢えて乱暴なる行為や、投機的事業をやれと進めるものではない。堅実なる事業に就て何処までも大胆に、剛健にやれといふのである。」

其の事業は果たして成立すべきものなるや否やを
探求する(一)

「首領百話」企業家の心得

渋沢栄一は、多くの新しいことを成し遂げたチャレンジャーでした。

日本初の銀行であった第一国立銀行(みずほ銀行)の設立だけではなく、その他に創業・出資・経営に関与したのはおよそ500社にもなります。その中には、王子製紙、日本郵船、東京海上保険(東京海上日動火災保険)、東京貯蓄銀行(りそな銀行)、日本興業銀行(みずほコーポレート銀行)、東京ガス、大阪ガス、富士製鋼(新日本製鉄)、NKKK(JFEスチール)、石川島平野造船所(IHI)、東洋紡績、澁澤倉庫、帝国ホテル、帝国劇場(東宝)、サッポロビールなどがあります。

栄一の創造力が豊富であったことには間違ひありません。ただ、これほどの功績は一人で成し遂げたわけではありません。多くの日本人が、

同じ目的で結びついたからこそ、達成できたのです。このことを「忘れてはいけない」のは、現在の日本人がもしもありません。

栄一が残した訓言に、私たちが忘れてたものとして何があるか、ひもといて調べてみましょう。

実業創設の原動力は

私財の積み上げでなく「愛国心」

1 栄一は、企業家が注視すべき心得には4つある、と言いました。

2 其の事業は果たして成立すべきものなるや否やを探究すること。

3 個人を利すると共に国家社会も利する事業なるや否やを知ること。

4 其の企業が時機に適合するや否やを判断すること。

5 事業成立の晩に於てその経営者に適當なる人物ありや否やを考へること。

ビジネスモデルの有効性、収益性、事業発足のタイミング、そして人材の重要性は、時代を超え、現在のベンチャービジネスでも注視すべき課題です。

しかし、4つの教訓のうち、2の「国家社会も利する」という項目は、現在のベンチャー、もしくは既存企業であっても、注視していることとは言えないかもしれません。足元の業績が企業の持続性につな

がるということには、議論の余地はないでしょう。ただ、目先の数字を上げるという近視眼的な呪縛に縛られ、社会全体の収益性など考える余裕などないという現象をしばしば見受けま

栄一が次々と実施した実業創設の原動力は、私的な財を積み重ねることではなく、「愛国心」でした。もちろん、軍事主義を主張していたわけではなく、商人の「義」の道を成し遂げる主張です。

あの時代、西欧の列強各国にのみ込まれないように、封建制度社会の日本が近代国家として立ち上がることに貢献する義務感の実践だったのです。その時代から、国力の根源には民間の底力があるということに、栄一は着目していました。

また、社会的サービスとは、政府だけが取り組む領域ではないと思つたのでしよう。栄一が運営や財務的支援で関与した教育・福祉などの社会事業は600を超えるという研究もあり、熱心な慈善家でした。

栄一は、91年間の充実した生涯を経てこの世を去りました。激変の時代、栄一はリスクを「危険」ではなく「不確実性」のことだと正確に捉えていたのでしょうか。「不確実性」には「機会」の可能性も含んでいるのです。